

【論文】

パンゲノームII

大辻 正晴

Pangenom II

Masaharu OTSURI

要旨 (Abstract)

First, I explain again the ideas of *Pangenom* (Pangenome) and *Ursengung* (proto-blessing), originally presented in my "Pangenom: A Biotheological Essay" (2020), adding some new points. I then introduce and amplify the concepts of *Urbild der Menschen* (human proto-picture), whirl of life, enslaving system, and Eurasian slavery civilisation (type I and II). A civilisation, I believe, is nothing other than the totality of multiple, mutually related enslaving systems, each constituted for the strong exploiting the weak, by intervening in the whirl of human life. So every civilisation (at least known one) is, essentially, a slavery civilisation. At the end, I make a short suggestion about the way out of enslaving systems and the slavery civilisation (type II).

キーワード (Keywords)

汎ゲノム、原祝福、価値転倒、人間の原像、遊動狩猟採集者、生の形、刺激・反応体、生の渦、奴隷化システム、依存症産業、エンタテインメント産業、脳ハッキング、愛着障害、ユーラシア奴隷文明、身体忘失、マインドフルネス

一 序言

前稿¹⁾において私は、生命の原理としての汎ゲノム、という観念を提示した。本稿ではそこで論じ残したことを論じ、さらに汎ゲノムという観念から導かれるいくつかの論点について、あらたに論じた

い。
本稿は前稿とともに、来たるべき「Tractatus Biotheologicus」のための準備稿を構成するであらう。

二 生物神学

本節と次節では生命の原理たる汎ゲノムについて再説するとともに、前稿で論じ残したことを論じておく。詳細は前稿を参照されたい。

汎ゲノムとは、単一対象と見なされるかぎりの、地上のすべての生物個体（ウィルスも含め）のすべての細胞のすべての遺伝物質の総体である。生物個体はそれを細胞内部のゲノムとして分有する。それはすべての生命を貫通するもの、遍在する生命の原理であり、それゆえ生命自体の名にふさわしい。それは私たちヒトも含め、生きとし生けるものの生と性、また老と死を可能にし、また必然ともするがゆえに、この地上でもっとも神的なるものと呼ばれる。それは四次元時空に遺伝物質の軌跡が描きだす樹形、すなわち生命樹、その時間断面にはかならない。

地上のすべてのゲノムの総体を単一の対象と見なすことを擁護しよう。ここでは固有名で名づけることのできるものを単一の対象と見なしている。とはいえ対象であるには再認基準を要する。つまり、その対象がもるもの対象と同一か否かを決定する基準が存在することを要する。地上の遺伝物質の総体として導入される汎ゲノムがそうした再認基準を有するのは、明らかであろう。私たちは任意の対象について、それが汎ゲノムと同一であるか否かを決定できよう。汎ゲノムを単一対象と見なすことに困難はない。

すると、汎ゲノムとは遺伝物質の部分(merological sum)にすぎないのか？ 汎水と何が違うのか？——要点は起源の同一性、および連続性である。細胞内のゲノムは内在するメカニズムによって自己複製し、娘細胞に手渡されてゆく。このさい遺伝物質の半分(鑄型鎖)に、もう半分(相補鎖)がDNAポリメラーゼによって合成され補完されて手渡されることになる。つまり半保存複製であり、これが強い連続性を生ぜしめる。太初に生じた唯一の自己複製

分子、原ゲノムはこのようにして増殖し、全地を覆い、三八億年のあいだ一度たりとも途絶することなく、いまの私たちまで繋がっているのである。このような起源同一性と連続性が水には認められぬこと、言うまでもない。存在する水分子はそのつど、互いに何の関連もなくバラバラに合成されたのだ。たとい汎水が存在せずとも、汎ゲノムは存在すると言いうる。

ところで、ここまで生物と呼んできたものにはウィルスももちろん含まれる。かれらもまた当然ながらゲノムを保持している、すなわち汎ゲノムを分有している。しかしウィルスのゲノムは必ずしも二本鎖DNAではない。一本鎖DNAや一本鎖RNAをゲノムとして有する場合もある。その場合、二本鎖DNAのような半保存複製はないはずだ。それゆえ二本鎖DNAの場合のような連続性は存在しないのでは？ ウィルスは汎ゲノムを分有しないというべきなのか？——しかしウィルスのゲノムといえど起源は原ゲノムにあり、そこから複製の過程を経て現在に到っていること、明白である。そこに厳密な半保存複製はたしかに存在しないが、連続性(および起源同一性)はここでも、弱い形ではあっても、成立していると言えるだろう。つまりウィルスもまた汎ゲノムを分有している⁽³⁾。

さて前稿で、汎ゲノムは阿蘇山のごとく、いわばボヤケた対象なのだ⁽²⁾と述べた。そのような対象については再認基準に問題が生ずるように思える。二人の人間が阿蘇山の話をしているのだが、同じ語についていささか異なる理解をしているとせよ。一方は「阿蘇山」という語で山Aを、一方は山Bを意味している。違いはというと、阿蘇山頂にくわえてAは山麓の地点aを含むが、Bは地点aを含まないということ。このとき再認文「A=B」は真であるのか否か？(もし真でなければ、二人はそもそも異なる山について話していることになる。) 地点aが山頂からかけ離れた場所、例えば熊本大学の

一角だとせよ。このとき再認文は偽であろう。(この事例ではAはもはや語を誤用していると言うべきだろう。)しかしaがしだいに山頂に近づいてゆくなら、この再認文はどこかで真になり、さらに近づけば、ふたたび偽となるはずだ。では、真となるのはaが山頂からどれだけの距離にあるときなのか?——これを明確に定めることはできないだろう。ボヤケた対象はボヤケた再認基準を有すると言うほかない。ならばクッキリした対象とボヤケた対象という、相容れない二つの範疇があるのか?——クッキリした対象はボンヤリした対象のいわば極限事例であり、対象はあくまで対象という一範疇である、そう言うべきだろう。

三 祝福としての生

汎ゲノムより各細胞において伝令RNAが転写され、それに従ってリボソームでタンパク質がつぎつぎと作られる。この精密きわまる過程によって、生きとし生けるものはあらしめられ生かしめられているのであり、この過程が停止すれば一瞬たりとも生きていることはできない。これこそ生命の祝福、遍在する汎ゲノムの祝福である。それは私たちをあらしめ、生かしめている原祝福である。私たちすべて、生きとし生けるものすべては直接に、たえまなく、その身体を充たす汎ゲノムの祝福を受けている。それは三、八億年の祝福である。

そのことを得心するために、私たちは生、の次元（3）に触れねばならない。それは汎ゲノムのあらわに顕現する次元、原祝福の次元である。呼吸と鼓動は明瞭に、この次元を指し示す。あなたの気づき（mindfulness）を呼吸と鼓動に向けて、それを深く味わえ。あなたの生ける身体を深く、ふかく味わえ。自分が生命自体の祝福を受ける存在なのだ、あなたは自覚するだろう。たといコンクリート

の大海のただなかに囚われていても、遍在する生命自体の祝福はたえまなく降りそそいでいるのだと。

この祝福を、生きとし生けるものは等しく受ける。生きとし生けるものはすべて、遍在する汎ゲノムという大地に喜ばしく萌え出づる花々である。遍在するこの生命自体の観点から見ると、私たちはすべて等価である。生きとし生けるものはすべて、等価である。かくて、すべての価値は転倒する。もつとも卑しい者、もつとも惨めな者といえど、もつとも高貴な者、もつとも強大な者と、まったく等しく祝福された存在であるのだ。この認識は、じつに私にとり驚異であった。生まれきたるものを後から価値づけ、序列づける道徳や制度はすべて、人間の作りごとにすぎなかつたのだ。

四 人間の原像

汎ゲノムは人間の本来のあり方、人間の原像を定めている。遊動する狩猟採集者、一言で、これこそ自然選択が汎ゲノムに刻みつけた人間の原像である。それは人間の野生状態、野生の人間にはかならない。

すべての生物は特定の環境のなかで自然選択をつうじて進化したのであり、形態にせよ生理機序にせよ習性にせよ、その環境に適応するように形成されている。生きものはそれゆえ、それが進化した環境に組み込まれているのであり、そこから切り離すことができない。生きものはその環境のなかで、一つの生の形を有している。環境に組み込まれた固有の生の形から切り離して生きものを考えることはできない。

私たち人間もむろん生きものの例外ではありえない。進化の結果として私たちは生まれ、種に固有の環境、進化適応環境に適応するように形成されてきた。ハピリスからエレクトゥスを経てサピエン

スに至る歴史、二百万年を超えるホモ属の歴史、そのほとんどすべてで、私たちは遊動狩猟採集者であった。農耕と牧畜の始まりはごく最近、せいぜい一万年と少ししか遡ることはできず、私たちの身体も心も、遊動狩猟採集生活という生の形を前提とし、それに適応するように造られているのだ。進化医学と進化心理学という二つの科学が、そのことを指し示している。人間の原像が存在すること、それが遊動狩猟採集者であることを、この二つの科学は前提し、かつ確証する。^⑥

とはいえ人間の原像、人間の野生状態、それは多少なりとボヤけた像である。人類がそこに適応するよう進化してきた古環境は、必ずしも一様ではなかったから。とりわけ出アフリカ以降は。二〇万年前、東アフリカのサバンナに誕生した私たちサピエンス、おそらく七万年ほど前にその一部は生誕の地アフリカを出て、ユーラシア全土へ、さらに新大陸や大洋州まで拡散した。言うまでもなく、この列島に達して縄文人の祖先となった者たちも、そこに含まれる。サバンナを故郷とする私たちは、かくて極圏から熱帯林まで、高原から海洋島まで、気候も地理もさまざまな地に暮らすようになる。外見はもとより私たちの遺伝特性が地域ごとにかくも異なっているのは、一つにはこのためである。^⑦これによって遊動狩猟採集者という人間の原像が動くことはない。しかし、いくぶんボヤけたものとなるだろう。

ここで言われるかもしれない。——私たちが一万年前からまるで変わっていないかのように、おまえは語っていないか？ しかしながら農耕と牧畜の一万年、文明の一万年によって私たちは変容したのではないか？ 例えば、欧州人に見られる乳糖耐性。当然ながら、牧畜の出現以降に生じたものである。ウシやヤギの乳を利用するという生の形による選択、文明による選択が、欧州人のゲノムを変容

させ、哺乳類の成体がほんらい失うはずの乳糖耐性を成人においても維持せしめたのである。^⑧——たしかに。しかしヒト全ゲノムのうち文明によって変容した部分は何パーセントなのか？ こう問いを立てるなら、文明の一万年を経てなお、人間の原像は動くまい。細部について議論はありうるにせよ、人間の原像が存在すること、それが遊動狩猟採集者であることは、動くまい。

五 生の渦

汎ゲノムは生の渦を作りだす。細菌であれ動物であれ植物であれ、なべて生きものは外からの、また内からの刺激に、分有する汎ゲノムの定める仕方、種（および個体）に固有の刺激・反応図式によって反応する。生物個体とは内外の刺激に内外で適切に反応するもの、すなわち一つの刺激・反応体である。生きものがたえず刺激を受け、刺激に反応しつづけるなら、そこに一つの生の流れ、生の渦が生まれる。生きものが生きてあるかぎり、この生の渦はたとい外力に攪乱されようとも、生きものに固有の生の形、その生きものの原像をたえず描こうとする。

原初の単細胞生物を考えよ。それは外あるいは内からの刺激に特定の仕方でも反応する刺激・反応体であったろう。例えば、栄養や光の刺激には追いかけるという仕方でも、毒物や捕食者の刺激には遠ざかるという仕方でも反応する、そのような存在であったろう。刺激にこのように適切な反応をする細胞、環境に適応できる刺激・反応体のみが選択され、増殖してゆく。生きものが単細胞から多細胞になっても、その適切な刺激・反応の図式は当然ながら維持されねばならない。すなわち、多細胞生物もまた生存と繁殖のため、内外の刺激に適切に反応せねばならない。^⑨そのさい、個体を構成する一つ一つの細胞の刺激・反応図式が一つに統合されて、組織や器官、さ

らに個体全体としての適切な刺激・反応図式を形成するのでなければならず、かくて刺激・反応体としての多細胞個体が成立する。ニューロンと神経系を考えてみよう。樹状突起への刺激に、ニューロンは軸索に沿ってパルスを送達し末端のシナプスで伝達物質を放出するという形で反応する。この単純な刺激・反応図式に従うニューロンが繋がりあつて、神経系という高次の刺激・反応システムを構成している。このシステムは循環系や免疫系、運動系など他のシステムと密接に結合して、さらに高次のシステムを、つまり生物個体を構成している。こうして構成される個体は、全体としての刺激・反応図式によって内外の刺激に適切に反応することで、生存し繁殖するのである。さらに、ある個体が内外の刺激に反応し、同種や他種の個体がその反応に反応し、個体がその反応にさらに反応し、……、かくて刺激と反応の複雑きわまる連鎖が生ずる。それは環境のなかで環境と嘯みあつて、一つの生の流れ、生の渦を作り出すのである。(ある場所における種ごとの生の渦が絡みあつた、複雑きわまる総体を、その場所の生態系と呼んでよからう。)

私たち人間も何よりも、このような刺激・反応体として存在している。人間にも汎ゲノムの定める刺激・反応図式があらかじめ具わっており、私たちはその図式によって内外の刺激に内外で適切に反応することではじめて、生存し繁殖することが可能になる。⁽¹²⁾ここに一つの生の渦が成立する。私たちにおける生の渦はつねに、人間の原像を描こうとする。文明以前、私たちの生は環境を巻き込み、環境と嘯みあつて、数百万年にわたり緩やかな渦を描いていただろう。その渦はほとんどつねに人間の原像を、問題なく描き出していたことだろう。——だが私たちのこのような在り方に、奴隷化システムのつけ入る隙がある。

六 奴隷化システム

奴隷化システムはまさしく、私たちの刺激・反応体としての在り方につけ込んでくる。——強者が弱者を支配し、その生を取奪するシステム、それが奴隷化システムである。奴隷化システムは私たちの刺激・反応の連鎖に、生の渦に介入し、そこから利益を取り出すとする。いわば渦のエネルギーを利用して発電しようとするのだ。結果として私たちの生の渦は攪乱されてしまう。私たちの生は混乱し、空洞化し、衰弱してゆく。私たちの社会全体が、この奴隷化システムによって覆われている。

奴隷化システムのあからさまな典型として、タバコやアルコール、糖質、パチンコ、ゲーム、SNSといった依存物を利用する依存産業、を挙げることができる。合法とはいえ依存産業は、私たちの報酬系(腹側被蓋野に発するドパミン神経系)を依存物によって乗っ取り刺激・反応図式を書き換える脳ハッキングによって莫大な収益を上げ、繁栄を極めている。生活が崩壊し依存症と診断されるほど徹底して奴隷化される人々——意志が弱いとて蔑まれる人々——は、たしかにごく一部であろう。しかし依存傾向にある人々まで含めれば膨大な数にのぼり、依存産業の繁栄の源がここにあることは間違いない。だが依存物がもたらす一時の興奮や充足感は時間の経過とともにたちまち色あせ、けつして真の満足をもたらすことはない。依存物が与えてくれるのは貧しい代用経験にすぎず、身心はひきかえに破壊されてゆく。

依存産業のような露骨で破壊的な脳ハッキングでなくとも、あらゆる種の奴隷化システムは刺激・反応体たる私たちの本性を巧みに利用する。アイドル産業やマンガ・アニメ産業に代表されるエンタテインメント産業である。それは空疎な擬似刺激を大量に提示して、都合のよい反応、利益をもたらす反応を大規模に誘発する。私たち

は擬似刺激と本来の刺激とを区別できないため、擬似刺激にも反応してしまうからである。たとい理性が区別していても、私たちの基底部は本来の刺激、例えば人間と擬似刺激、例えばTV画面の人間（それは画素の集まりにすぎない）とを区別できない。¹³複製技術とメディアを利用して擬似刺激を大量に拡散することで、エンタメ産業はその意図する反応を、つまり消費行動を大規模に誘発し、巨大な利益を上げている。その一方で私たちは貧しい擬似経験、代用経験をあてがわれつつけるのだが、それが真の満足をもたらすことはない。それは生ける刺激・反応体の要求を充たしえないのだ。のみならず、代用経験を与えられる者は真正の経験をその分だけ剝奪されるため満足は深まるばかりで、そのことが、さらなる代用経験を追い求めさせてやまない。このように刺激・反応図式を都合よく書き換えることで奴隷化システムにとつての好循環が生じ、私たちの生は徹底して収奪されてゆく。

さて私たちの本来の生の形、人間の原像は時間という次元をも有することに注意しよう。胚から成体にいたる発生（development）の過程で必要な刺激や経験がそのつど存在することを、それは意味している。特定の種類の必要な刺激が内外から与えられ、個体がそれに反応し、その反応が新たな刺激となり、……、このような過程を重ねることで個体は発生の経路を進んでゆく。人間の原像においては、必要な刺激が適切に与えられ、それに反応するという応答の経験を重ねることで、人間固有の生の形のなかで個体は順調に成長を遂げたらう。発達（development）の初期において、母親を中心とする周囲の個体との刺激・反応の応答経験をつうじて愛着関係がしっかりと形成されることも、そこに含まれる。そのために必要な刺激や経験が十分でなければ愛着も形成不全となり、以降の発達に影響が及ぶ（いわゆる愛着障害）。これは自傷や自殺企図、大量服

薬などの症状を示す境界パーソナリティ障害の要因であるが、依存症の背後にも愛着の問題があると考えられる。¹⁴さらに、愛着に問題を抱える者はしばしば、人間の原像においては存在しえなかったような病的な「承認欲求」に駆り立てられ、代用承認を求めて企業や組織という奴隷化システムに自分を過剰適応させてゆく。¹⁵それは次世代の愛着形成にも影響を及ぼさずにはいられないだろう。こうして愛着を体系的に、世代を越えて傷つけ、刺激・反応図式を都合よく書き換えつつけることで、奴隷化システムはひたすら生産し消費するだけの労働・消費機械へと、祝福された私たちを作り変えてしまふ。かくて奴隷化システムは繁栄し、拡大し、増殖し、世界を覆い尽くしてゆく。

いまや私たちは奴隷化システムのなかに生まれ、大量生産される安価で貧弱な代用経験によって生き埋めにされ、窒息し、息絶えようとしている。水中に産み落とされた卵から孵った雛鳥、それが私たちである。ようやく殻を割って外に出たら、そこは水中だったのだ。本来の場所、自分にふさわしい場所に、私たちは生まれてこない。これが私たちの悲劇、静かなる悲劇である。

ここまで奴隷化システムについて語ってきた。しかし、なぜ奴隷と呼ぶのか？——ほんらい等価であるはずの私たちの内部に強者と弱者の差を作りだし、前者による後者の支配と収奪を固定するがゆえに。どのような種類のものであれ、奴隷化システムにはいくつの特等席が設けられている。作動するシステムがたえず産出しつつける蜜を、いったん座りさえすれば舐めつけられる特等席である。この席に座っている強者を奴隷主と呼ぼう。人々はこの特等席を目指して競争する、いなむしろ、させられる、奴隷化システムそのものによって。かれらの刺激・反応図式を、奴隷化システムが都合よく書き換えてしまっているからだ。（そして奴隷どうしの競争

が激しければ、システムが産出する蜜もそれだけ増加する。一方で、すでに特等席に座っている奴隷主たちは、自分と自分の遺伝子を受け継ぐ者がそこに座りつづけられるよう、あらゆる手段を用いて恥じることがない。¹⁶⁾

だが忘れるな。人間の原像においては、誰も奴隷ではなかった。支配され収奪される者は、誰もいなかった。¹⁷⁾

七 奴隷文明、あるいは歴史の幻想

奴隷化システムの起源と歴史について、想像（あるいは妄想）を逞しくしてみよう。

歴史のある時点で、人間観と生命観の大きな転換が生じた、そのように思われる。おそらくは農耕と牧畜の開始とともに（ことによると、それに先立つ定住生活の時代からすでに）。転換とはすなわち、生そのものが祝福であり、すべての人間、すべての生きとし生けるものは等価であるという原初の遊動狩猟採集民の人間観と生命観から、共同体に役立つかぎりでのみ人間や生命には価値があるという農耕・牧畜民の人間観と生命観への転換である。文明初期の厳しい条件が、この転換を強いたのかもしれない。奴隷化システムの起源は、ここにあるのではないか。農耕と牧畜の始まりとともに、共同体への貢献や生産性によって人間が、そして生きとし生けるものが量られ、序列づけられるようになる。私たちは内在する神性を否認されて無価値なものに貶められ、原初の共同体はかくして、強者が弱者を支配し収奪するための奴隷化システムに変貌する。

やがて少数が多数を支配し収奪する巨大な奴隷化システム、ユーラシア、奴隷文明が生まれる。¹⁸⁾ ユーラシア、というのも、それは出アフリカ以降に、おそらくは中近東に最初に出現したはずであるから、そこにさしあたり、I型とII型の二型を区別することができよう。

I型。これは農耕と牧畜の開始をきっかけに出現した最初の奴隷文明であり、古代型と言ってよからう。ここでは私たちは分有する内なる神性を剥ぎ取られ、土くれにまで貶められる一方で、一人一人から剥ぎ取られた神性は人格神という虚妄へと仮構される。人間のうち神に近い少数者たち（祭司や王、選民）は神より遠い多数者たち（民衆や奴隷、異教徒）から聖別され、前者が神の名のもとに聖典と剣によって後者を支配し収奪することが正当化される。ついにはアブラハムの宗教が成立して、生命自体の祝福は唯一神の祝福にスリカエられ（史上最大のスリカエ）、私たちの生は唯一神への負債となる。生命の連続性は見失われ、人間とそれ以外の生きものが鋭く対立せしめられて、「神の似姿」たる前者に後者を支配し収奪する権限が与えられる。

II型。これは最近になってユーラシア西方に出現し、世界に拡がった奴隷文明であり、近代型と言ってよいだろう。²⁰⁾ I型に比して特筆すべきは、それが自由と平等という観念を道具として支配と収奪を行うことである。そこで語られる平等は、空語にすぎない。「公正な」競争のもとで強者が弱者を支配し収奪するのを正当化することが、自由と平等という観念の機能にはかならない。能力があつて共同体に貢献する強者は、能力がなくて貢献できない弱者より価値があり、より多くの報酬を受け、より幸福に生きるに値すると見なされ、支配する強者も支配される弱者も、誰もそのことを不思議に思わない。私たちは奴隷文明のイデオロギー、奴隷化イデオロギーに洗脳され尽くしているのだ。²²⁾

こんにちII型はさらに発展して、デジタル全球資本制という形態をとりつつある。刺激・反応図式を都合よく書き換えられてしまった私たちは、自由と平等と自己責任の名のもとに、自由意志に基づいて、奴隷化システムにより徹底して支配され収奪される。²³⁾ か

くて奴隷文明はその極点に達したかに見える。デジタル技術によって限りなく捏造される厚みゼロ、原価ほぼゼロの代用経験によって養われる私たちの、なんと貶められていることか！——およそ奴隷文明は私たちのよき生のために造られてはいないのだ。しかし、奴隷化システムによって収奪されるには、生命自体の祝福を受けた私たちの生はあまりに高貴である。

最初に想像あるいは妄想と言ったのは、なにか実証的な根拠があるわけではないから。しかし大まかに、人類史をこうやって見ることができないかと思っている。

八 結びにかえて

Ⅱ型奴隷文明の内部に生まれた私たちが、奴隷とならずに生きてゆくことは可能か？ 可能であるなら、いかにしてか？ さらに、奴隷文明でない文明は可能なのか？——こうした問いへの答えは、私にはまだない。だが、それ以前にまず問うべき問いがある。つまり、自分が奴隷化されているという視点をいかに確保するのか？ そもそも、なぜ私たちは奴隷化されることを許してしまうのか？——その一因は身体²¹忘失ではないか。身体を忘れ去ること、生の次元を忘れ去ることが問題なのだ。自分が生命自体の祝福を受けた存在であるのを見失うことで、私たちは奴隷化イデオロギーによる洗脳と脳ハッキングを許し、やすやすと奴隷化を受け入れてしまうのである。そのとき私たちは自分が奴隷化されていることにすら気づかない。

これが正しければ、奴隷化されているという視点を確保するため
の第一歩は、身体への、生の次元への気づきを取り戻すことになる
だろう。新しい身体教育、新しい、真の意味での体育が必要ではな
いか。——しかしながら、いまは筆を擱くことにしたい。

註

(1) 大辻正晴「パンゲノム——生物神学試論——」、『人文科学論叢』一、熊本大学人文社会科学部、二〇二〇年。

(2) 注意せよ、DNAポリメラーゼもまたタンパク質であり、当然ながら、遺伝暗号によってゲノムに書き込まれている。タンパク質だけでは足りない。次世代に伝達されるものはすべてゲノムにある。ゲノムにないものは生命にはない。

そうだろうか？ 配偶子や胚ゲノムの塩基配列がデタラメに変異したとしても、生物個体がそれに応じて自在に変わることはい。個体発生の精密な過程が、それを許さないのだ。この発生拘束 (developmental constraint) はしかし、ゲノムに書き込まれていないのでは？——発生拘束はなぜ生ずるのか？ それはどのようなタンパク質が、発生などの段階に、どの組織で、どれだけの量、作られるかが、ゲノムによって定められていることによるはずだ。発生拘束もまた、次世代に伝達されるものである。

(3) RNA世界説が正しくて原ゲノムがRNAであった場合も、同様に考えられるだろう。つまり、RNAからDNAへと遺伝物質が交代していった時期があったはずだが、そのときも弱い連続性が成立していたと見なせるし(コドンの共通性)、それまでであった生命樹が枯れてゆき新たな生命樹が成長を始めたと考えすることはできないだろう。

(4) それは祝福を受けるものがそれによってはじめて存在を開始する、そのような特異な祝福であり、それゆえ原祝福と呼ぶ。

(5) 私たちはネズミやハエよりも人間を尊重する。ネズミやハエを殺すことは悪ではない(少なくとも、大した悪では)が人間を殺すことは悪である。そのことの正当化を、しかし私たちが人間であること以外に求めうるだろうか？(それとも、殺人は火星人にとつても

悪であるのか?)

(6) それ以外の、いったい何でありうるのか? 少なくとも、稲作農耕民でないことは確かである。

ところで、人間の原像には二重の意味があることに注意が必要だろう。一つに、それは歴史の事実、文明以前の人間のあり方である。いま一つに、それは汎ゲノムに刻まれて現在の私たちにも潜在し、しかるべき条件が揃えばいつでも開花しうる可能性、いわば人間の「潜在自然植生」である。

(7) 図鑑を開けば、生きものの姿かたちを描いた美しい図像が目を奪う。習性や生態、生息環境についての記述は、添えものにすぎない。まるで生きものの本質が目に見える形態に尽きるかのようだ。習性や生態や生息環境から生きものを孤立させて、私たちは捉えてしまふ。しかし生きものはその習性や生態、本来の生息環境から、一言でその生の形から、切り離すことはできない。囀りは、いな小枝すら、小鳥の一部である。

注意しておけば、生の形には時間、次元も存在する(これも図鑑において覆い隠されていることの一つだ)。受精卵から成体に至る発生過程と、その過程での環境との係わりもまた生の形の一部であり、生きものの原像に属する。むしろ人間の原像についても同様。

(8) 人間の原像という補助線を引くことで、すべてが明瞭になる。どうして子どもは勉強が嫌いなのか? どうして肩こりや腰痛に悩まされるのか? どうして座っている時間が長いほど早く死ぬのか? どうして人工透析や引きこもりや児童虐待が増加の一途を辿っているのか? どうして非婚化(俗にいう少子化)が止まらないのか? ——一本の補助線を引くことで、すべてが明瞭になる。(マツチボンプとしての文明。)

(9) 生物は原産地から離れるほど遺伝多様性を失う。人類においても

一般に、アフリカから離れた集団ほど遺伝多様性は失われ均質になっていると考えられる。

(10) コ克蘭、ハーベンディング『二万年の進化爆発』、古川奈々子(訳)、日経BP社、二〇一〇年。成人の乳糖耐性を生み出したような選択を、この書は自然選択と呼んでいる。私はむしろ、文明選択と呼びたい。

文明の一万年が変容させたと思われる私たちの特性は、むしろ乳糖耐性に尽きるわけではない。こうした事実が人間の原像という觀念にどのような影響をもたらすかは、ひきつづき検討を要する。

(11) 多細胞化したい、刺激により適切に反応するために(おそらく有性生殖の進化と並行して)生じたのだろう。多細胞であることは、たまたま何らかの環境において生存と繁殖に有利だった(適切な刺激・反応図式を形成しえた)はずで、さもなくば多細胞化は生じなかつたらう。

(12) ここで完全な決定論を主張するつもりはない。私たちは与えられた刺激に定まった仕方での反応するだけの存在ではないだろう。しかし、その基底において私たちがこうした刺激・反応体であることは明白である。

注意しておけば、刺激への反応とは反射のような単純なものに限られない。教育や経験によって身につける反応、高度に社会化された言語化された反応もあって、人間の独自性もそこにあるだろう。私たちの日常は大部分、こうした反応でできている。刺激への自動反応でないような行動、例えば熟慮と決断による行動のほうが珍しいはずだ。教育や経験をつうじて獲得する刺激・反応図式を、もちろん汎ゲノムがいちいち直接に定めているわけではない。しかし、汎ゲノムの定める基底図式の変形として説明されよう。人間における刺激・反応図式はもとより、そうした変形をあらかじめ予想し組み

込んだ、柔軟なものとして定められてある。あたかも多様な抗原に対応するための多様な変異を、免疫細胞の（分有する汎）ゲノムがあらかじめ織り込んでるように。

- (13) 奴隷化システムの利用する擬似刺激は本来の刺激よりも惹きつける力が強くなくてはならないから、しばしば超正常刺激 (supernormal stimulus) という形をとる。例えばアイドル、アニメキャラ、ボーカロイド。(ミヤコドリは自分の卵をうち捨て、巨大なニセ卵を抱いて離さない。ティンバーゲン『本能の研究』、永野為武(訳)、三共出版、一九七五年。)

この概念、あるいは感覚搾取 (sensory exploitation) や経験剥奪 (deprivation of experience) といった一連の概念は途方もなく重要であるにもかかわらず、わが国の人文・社会学者にほとんど知られていない。

- (14) 愛着障害については、岡田尊司の一連の著作を参照されたい。
 (15) 承認という社会報酬によって報酬系を乗っ取る、これも一種の脳ハッキングと言えよう。いわゆる過労死や過労自殺を考えるにも、この視点が必要ではないか。

- (16) 奴隷主たちもまた、ある意味では奴隷なのだが。
 (17) そこがユートピアであったと言うつもりはないが、人間の原像つまり文明以前の遊動狩猟採集社会においては、成員は原則として平等であり、貧富や貴賤の差は存在しなかった。

途方もない格差、貧困とスラム、慢性の飢餓、失業と恐慌、戦争と大量虐殺、そしてパンデミック——このすべてが、文明以前には存在しなかった。

文明以前の社会については、エーレンバーク『先史時代の女性』河合信和(訳)、河出書房新社、一九九七年、第二章。文明の災厄については、ライアン『文明が不幸をもたらす』鍛原多恵子(訳)、

河出書房新社、二〇二〇年。

- (18) 互いに連関しあった多数の奴隷化システムの総体を、一つの巨大な奴隷化システムと見なせるだろう。これを奴隷文明と呼ぼう。
 (19) ここで奴隷文明が始まったのだと、砂漠にそびえ立つ左右対称の巨大なジツグラトは高らかに告げる。(巨大建造物は奴隷文明の徴候である。)

なお、新大陸にも奴隷文明が独立に生まれたことは明らかだが、それは旧大陸の奴隷文明によって絶滅させられたがゆえに考慮しない。

- (20) I型は消滅したわけではない。それは例えばモスクワから北京へて平壤にいたるユーラシア北方に、いまま姿を変えて息づいている。

(21) 結果の平等のみが平等の名に値する。機会の平等は強者による弱者の収奪を正当化するイデオロギー、奴隷化イデオロギーである。今日、それは地球規模の均一な労働市場を形成して私たちを買い叩くために活用されている。

- (22) 「働かざる者、食うべからず。」労働しない者は、死ぬ。——奴隷化イデオロギーの、これほど直截な表明もあるまい。(奴隷化イデオロギーとしてのプロテスタンティズム。)

(23) 今次の戦争の本質、それは結局のところ新旧二つの奴隷文明のあいだの衝突である。

(24) そこには何よりも先にマインドフルネスとボディワークが含まれねばならないだろう。